様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４３２

研究課題名（和文）新語形成におけるプロソディーと音韻・形態・意味構造に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on prosody and linguistic structure in new word formation

研究代表者
田中　真一（Tanaka, Shin'ichi）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：１０３３１０３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語や諸言語に見られる、とくに新しいタイプの語形成におけるプロソディーの振る舞いについて、音韻、形態、意味構造といった種々の言語構造に着目し、調査、分析を行った。それらの分析を通して、日本語や諸言語が、語形成の要請については新しい要素を加味しながらも、プロソディーの実現については、その言語の基本的な構造が反映されることを、辞書を始めとするコーパス調査および、被験者を対象とした知覚調査を通して明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research, we analyzed the prosody of the new word formation in Japanese and Italian. Through the corpus study as well as experiment tests, we reported that the prosody in the new word formation is basically affected by the phonological structure of their own language, although several characteristics as new words are seen.

研究分野：音韻論

キーワード：語形成　借用語音韻論　意味構造　形態構造　プロソディー　音韻構造　コーパス調査　知覚

１．研究開始当初の背景

（１）言語における話者の諸操作を観察するのに有用な手段となる語形成(word formation)にはいくつかの研究が見られるが、新しいタイプの語形成に関する実証・理論的な研究は、ともに、それほど多くない。また、それらが、一般の語形成と比べてどのような特徴を持ち、さらには、どのような面で類似しているのか俯瞰的に論じた研究も多くを数えないという現状がある。

本研究はそれらの溝を埋めるべく、また、比較的新しい現象を報告することを通して、より広い見地から新語形成を分析する。とくに、プロソディーの現象に着目して、従来から指摘されてきた種々の理論的な知見が、どのように語形成に関わるか検証する余地がある。

（２）また、借用語形成を含む語形成には、音韻・形態・意味等の構造が有機的に関係し、言語研究におけるインターフェースが期待される。しかしながら、それらは単独で扱われることが多く、さまざまなレベルにおける関係性について扱った研究はそれほど多くないというのが現状であった。本研究では、とくに（借用語を含む）新語という比較的新しい語をデータとした分析を通して、こういった事柄に関する知見の深化が期待される状況にあるといえる。

２．研究の目的

（１）新しいタイプの語形成（および借用語形成）に関する、とくに韻律・プロソディーの現象に焦点を当てることにより、記述的にも理論的にも新しい知見を提供することを目的とする。また、それと同時に、音韻・形態・意味等の言語部門間、さらには、言語現象間のインターフェースを提示することを目的の一つとする。さらには、従来の研究で得られた知見との関わりを提示することも目的とする。

１の「背景」で述べたように、従来、そのようなことに主眼を置いた研究はそれほど多くなかったと思われる。本研究では、それらの溝を埋めるべく、基礎研究における新たな知見の提示を目的とする。

（２）また、上記により、日本語音声、借用語音韻論の基礎研究の面で、さらには、日本語・英語等の言語音声教育への応用に寄与することを、副次的な目的とする。前者については、音韻論や形態論などの教材として成果の一部を利用できる可能性が大いに期待できる。

３．研究の方法

（１）言語データの調査手段として、まず、辞書や雑誌、インターネットサイトなどの資料・コーパスを用いた手法によって分析を行った。これにより、意味や語形、発音などの情報を総合的に記録し、分析を行うことができる。

（２）また、フィールドワークによる生成調査、具体的には、被験者（言語話者）を対象とした音声録音を行い、アクセント、リズム、分節音等の情報を記録し、文字化することによって分析を行う。さらには、録音音声を、被験者に聞かせる知覚調査等の手段を用いることにより、話者の音声に対する反応を分

析する。

このように、言語現象を複数の観点から実証的に明らかにする。その上で、複数の言語との対照を通して、現象の異同を分析するのと同時に、それらの理論的考察を試みる。

このように、これまでに検討されることの少なかったいくつかの現象に対して焦点を当てると同時に、語形成と借用語音韻論とを同時に見通すことを通して、より統一した一般化を目指した。

４．研究成果

（１）語形成の分析の一つとして、複合語におけるアクセントの変化について、また、その比較・対照として、単純外来語におけるアクセントの変化について、いずれも大阪方言話者を対象とする調査をもとに分析を行った。いずれの調査においても、音節構造をはじめとする一般言語学的性質（たとえば、より重い音節にアクセントが引きつけられやすい等）が確認された。それとともに、共通語からの影響（類似性）というような、社会言語学的なプロソディーの変化が確認された。

①複合語のアクセントについては、辞書調査および若年話者を対象としたインフォーマント調査の両方の手段によって、従来から同方言について指摘されている「特殊モーラへのアクセント回避」という現象について再検討した。多くの先行研究の言及する特殊モーラの種類のみならず、後部要素の音韻的なサイズがアクセント付与に関与すること、具体的には、後部要素が音韻的に短いほど、特殊モーラへのアクセントが回避されやすいことを指摘した。それと同時に、３世代のプロソディーの変化として、大阪方言が東京と同じく、音節という概念を利用する方向に移行していることが明らかになった。

②大阪方言外来語アクセントについては、とくにアクセント核と語頭ピッチ（式）の二点に着目し、前者（アクセント核）の異同については、共通語（東京方言）との差異が非常に小さく、また、平板化率とアクセント核前進率の上昇という面で、大阪方言が共通語と類似の方策に変化していることが明らかになった。

また、後者（式）についても、共通語の影響が見られ、大阪方言の若年話者がとくに語頭重音節の語に対し、高い割合で高ピッチとして実現し、また、語頭軽音節の語を低ピッチで実現しやすいという面で、伝統的な大阪方言におけるピッチ付与方策と異なるのと同時に、共通語と類似の方策に変化していることが明らかになった。

さらに、式の選択について、話者の世代を問わず、親密度（なじみ度）の比較的高い語や、「コン」（コントロール、コンピューター、コンベアー）や「イン」（イントネーション、インターン、インフルエンザ）などのような頻繁に生起する音連続に対しては、大阪方言にとって非デフォルトの型である低起式が選択されるといったような、意味構造および形態構造との対応の見られることが明らかになった。

（２）日本語以外の言語における語形成のプロソディーの分析として、とくに、イタリア語のアルファベット頭文字語の分析を、コー

パス調査により行い、日本語（東京方言と大阪方言）における知見と対照を試みた。

イタリア語は、基本的に語の末尾位置にあるアルファベットの強勢をそのまま主強勢として残すことが明らかになった。このことは、同じ現象について日本語をデータにした先行研究と類似の結果となった。

しかしながら、異なる点として、イタリア語は自言語の一般的な結合法則の適用されることが確認された。具体的には、末尾以外に位置するアルファベットの強勢は弱化はするものの、（日本語とは異なり）第２強勢としては残ること、また、子音始まりのアルファベットにおいて、二重子音化が観察されることが明らかになった。

（３）イタリア語の二重子音と借用語音韻論（loanword phonology）との関係について、日本語母語話者を対象としたイタリア語単語の知覚について調査を進めた。イタリア語における強勢音節と非強勢音節とで、日本語話者が二重子音知覚について異なる反応（強勢音節においての方が、相対的に二重子音の知覚がされやすい）を見せることが明らかになった。また、このことが、イタリア語の実在借用語の受入に関係するする可能性が浮かび上がった。

（４）日本語とイタリア語両言語における双方向の借用語受入方策の異同について調査および分析を行った。

日本語とイタリア語は借用元である相手言語（L2）の強勢あるいはアクセントを、それぞれ自言語（L1）のアクセント、あるいは、強勢と捉え直すことによって認識し、L2 においてそれらの付与される位置の情報を参照しながら、自言語のものとして受け入れていることを、辞書（データベース）の分析をもとに確認した。それと同時に、L1 の音韻制約を、上記の知覚に加味する形で、最終的な出力型を産出することが明らかになった。

（５）イタリア語が日本語を含む複数の言語から語を借用する際の、強勢、音節構造、分節音構造の保持、非保持について調査と分析を行った。辞書にもとづく調査、分析の結果、イタリア語が異なる L2 によって、異なる受入方策を採る可能性が提示された。

（６）上記の諸成果の結果を踏まえ、音韻論・音声学の入門書を現在作成中である。出版社にも出版については了承済みであるので、これらの研究成果を含んだ教材のできるだけ早い時期の公開を目指している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

① 田中　真一、　大阪方言複合語におけるアクセント回避と位置算定、　開拓社、日本音韻論学会編、音韻研究、査読有、第19号、2016、81－88

② 田中　真一、　音声の意識と法則、　明治書院、　日本語学、　査読無（招聘）、第35巻2号、　2016、14-24

③ 田中　真一、　日本語・イタリア語の借用語における相手言語からの母音長受け入れと音韻構造、　神戸大学言語学研究室、神戸言語学論叢、　査読無、　第10号、 2016、37-50

④ 田中　真一、　平板アクセントと言語構造、　J&C出版、　日本語学・日本語教育、　査読無（招聘）、　第2巻（音声・音韻）、　2013、73－90，281－294

〔学会発表〕（計　6　件）

① Tanaka, Shin'ichi,　The adaptation of Italian geminates and vowels in Japanese and its relation to perception, GemCon 2015: ICPhS 2015 (International Congress of Phonetic Sciences 2015),　Glasgow (Scotland), 2015. 8. 12

② Tanaka, Shin'ichi,　Gemination and Accent in Japanese loanwords from Italian: *Mitate* in loanword phonology, 第１回日本語言語学研究会、オックスフォード大学日本語研究センター、　オックスフォード（イギリス）、2015. 8. 15

③ Tanaka, Shin'ichi,　Tonal change of loanwords in Osaka Japanese, ICPP3 (3rd International Conference on Phonetics and Phonology), NINJAL, Tokyo,　2013. 12.20-22

④ 田中　真一、　大阪方言における特殊モーラへのアクセント回避と音韻構造、ICPLJ8 (8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese), NINJAL, Tokyo,　2014. 3.22-23

〔図書〕（計　2　件）

① 田中　真一　他、　開拓社、　現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点、2015、380

② 田中　真一　他、　J&C 出版、　日本語学・日本語教育、　2013、　310

６．研究組織

(1)研究代表者

田中真一　Tanaka, Shin ' ichi（研究代表者）神戸大学大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：10331034